青森聾学校　校長室だより

# LOVE　青ろう　ONE　TEAM

令和元年１１月１日　第１０号

１０月２６日土曜日　青聾祭当日の朝。昨夜からの雨で駐車場には水たまりができています。来校される方の足元が濡れないようにと、三浦さんが水をかいています。一人一人のそういうほんの少しの心配りや裏での働きが、私にはとても尊いものに感じます。そういう気持ちが集まって、実行委員長が感じた「ＯＮＥ　ＴＥＡＭ」になっていったのだろうと思います。

保護者の皆様、ご来校いただき子どもたちへのご声援模擬店等でのご協力ありがとうございます。見ている人の心を動かす力。子どもたちのこの力は、いったいどこから来るのでしょう。祭りの後の静けさの中、満たされた表情をしている皆を見て思いめぐらせています。

## 青聾祭　実行委員長　工藤　幸子

青聾祭実行委員長としては力不足でしたが、子供達、保護者の皆様、先生方、就労促進センターの方々に支えられ、無事に終えることが出来ました。当日の舞台発表では、子供達が本当に良い顔で舞台に立っているのを見て、これまでの取り組みに頭が下がる思いでした。ＰＴＡ模擬店も大盛況で、温かいお味噌汁にお客様の心も温まったのではないかと思います。当日まで計画・準備等ありがとうございました。みんなが協力し合い、青聾祭に向けて「ＯＮＥ　ＴＥＡＭ」として取り組んでいることを実感し、私自身もたくさんのことを学ぶことができました。本当にありがとうございました。

## 幼稚部「おすしのえんそく」

### 演目担当　　松倉　春香

幼稚部の「おすしのえんそく」は、自分の役を、自分で決めることから始まりました。自分の好きなお寿司やお店見学でスシローに行って食べたお寿司を思い出しながら、役を選びました。

今回の劇は、ダンス２曲、5人で繋がって歩く、石をボウリングで倒すところが見せ場でした。特に、5人で繋がって歩くところは、みんなが大好きな場面の１つだったと思います。

青聾祭の練習が始まってからは、なかなか５人そろって練習する機会が少なかったですが、練習の時間は一生懸命な姿をたくさん見せてくれました。

本番では、ちょっぴりドキドキしながらも台詞を話す姿、元気いっぱいに舞台を走り回る姿、笑顔でダンスをする姿、色々なハプニングもとっても可愛く、見ているお客さんを自然と笑顔にしてくれました。ひまわり組・さくら組は、台詞もとっても上手にお話ししてくれました。たんぽぽ組は、一生懸命ダンスする姿と笑顔がとても素敵でした。

私自身は、幼稚部の劇を担当するのは初めてでしたが、周りの先生方からのアドバイスをいただき、微力ながら努めさせていただきました。また、幼稚部の保護者の皆様からの衣装や練習等での御協力も本当にありがとうございました。

正面から見ても、後ろ姿も、とっても可愛い５人のお寿司ちゃん達。とっても頑張りました！！ありがとう。

## 小学部「レストランクローバーへようこそ♡」
### 演目担当　木村　一子

昨年度、小学部の子供達が、音楽で学習していた♪パプリカ♪のダンスがとってもかわいいとずっと思っていました。いつか、どこかで、発表できたらいいなと密かに思い、今回、青聾祭で発表しようと決めました。劇では、Ｓ君、Ｒさん、ｋさんがそれぞれ２役＆ナレーターを務め、初めから最後まで、ほとんど休みはなく、フル出場でした。台詞のほかに、ダンス、歌、ラグビー、そして早着替え…。盛りだくさんの内容を、３人とも、しっかり動きを覚え、頑張りました。

９月末に台本を配布したときに、ｋさんから「泣きじゃくるってどうやればいいのですか」と即、質問がありました。『泣きじゃくる』…なかなか馴染みのない言葉。ｋさんは『泣く』との違いを考えて、自分なりに動きを表現しました。Ｒさんは、「ベリーベリーサンキュー」をどう話したらよいか考えました。アメリカ人の明るくフレンドリーな感じを見事に表現できました。Ｓ君は、ラグビーボールを持って走るところにかなり苦心しました。かっこいいラグビー選手はどう走ったらいいのか考え、足を上げて走ることで表現しました。３人とも、それぞれの役に向き合い、どう表現したらよいか考え演じることができました。ウエーター＆ウエートレスもとっても素敵でした。はじめは、台詞を話すだけで精一杯だった３人ですが、だんだん気持ちを入れて話したり、動いたり、表情を考えたり、役になりきって演じることができました。台詞練習では友達と合わせてみたり、ダンスの動きを確認したり、自分達で積極的に練習に取り組んでいる様子が見られ、とても素晴らしかったです。劇はみんなでつくるもの。３人の頑張りでつくりあげた劇は、とても素敵なものとなり、大成功でした。劇「レストラン・クローバーへようこそ♡」のおもてなしはいかがだったでしょう。青聾祭を見に来てくださった方々を元気と笑顔にしてくれたのではないかと思っています。

## 中学部「前を向いて～命のバトン～」
### 演目担当　浦田　大地

生徒たちが何度も話し合い、この題名に行き着いたとき、非常に感動したことを覚えています。思い返せば、今年の３年生は並々ならぬ思いで、青聾祭に向かっていました。昨年度の３年生の後ろ姿を見ていたのでしょうか。「去年の先輩のように、僕が、私が、引っ張っていくんだ。」と、熱い思いで話し合い、練習に取り組んでいました。演目の内容決め、題名決め、曲選び、幾度となく行った話し合いでは、３年生が１年生に分かるように丁寧に教えてあげたり、サポートしたりする姿が見られ、１年生も、そんな３年生の思いに応えるように、積極的に意見を話していました。題名は台本を読み合わせした後に、話し合いで決めることになっていました。生徒一人一人が台本を自宅に持ち帰り、何度も読み返し、それぞれの考えを持ち寄りました。今回の演目のテーマは「家族の大切さ」「命のつながり」。なかなか難しいテーマです。台本には直接的に表れていないこのテーマをどこまで自分の中で、咀嚼できているのか。正直、不安でした。ですが、いざ蓋を開けてみると、生徒一人一人がみな、テーマにのっとった題名を持ち寄ってくるのです。生徒からは「家で５回、読みました。」「ひいじいじの、このセリフが伝えたいことだよ。」「命はいれたい。」などと、多くの意見が出ました。生徒たちの青聾祭に対して向かっていこう、成功させよう、僕らはお客様に伝えたいんだという熱意に感動したとともに、演目の成功を確信したのです。演目練習では、伝え方や演じ分けに苦労していました。「これだと怒っているように見えない。」「嫉妬という手話は分かりにくいから違う手話の方がいい。」「暗い話し方にすると大きな声で話せない。」･･･。多くの壁にぶつかりながらも、それを乗り越えようと、何度も練習し、喉を痛める生徒もいました。その姿から教師の演技指導にも熱が入り、活気ある練習でした。本番当日、ステージ上には自信に満ちあふれ、堂々と演じる生徒たちがいました。演目が終わると、あちらこちらからすすり泣きの声が。生徒たちの思いが、言葉にのって、観客のみなさんに伝わった瞬間でした。中学部の生徒たちには、どのような困難

でも乗り越えることができる力が備わっています。私たちが、「難しいかな。」「大丈夫かな。」と思っていても、試行錯誤しながら、本番では100%の力を発揮します。その過程を身近で味わうことのできた私は、とても幸せでした。ここには書き切れない感動がまだまだたくさんあります。これからも中学部の生徒一人一人の活躍が楽しみです。

## 高等部「友情～みんなちがって　みんないい～」
## 演目担当　三津谷　星子

夏休みに入る前に、「青聾祭で発表したいこと、内容と理由、見に来てくれる方々に伝えたいこと」の３つを考えるプリントを生徒たちに配付し、今年度の青聾祭の劇の取り組みがスタートしました。立候補してくれたリーダーの平田くん、サブリーダーの澤田さんを中心に定期的に話し合い、劇にダンスを入れるかどうか、参考にしたい作品、あらすじ、ダンス、劇のタイトル、バック絵、衣装、必要な道具、配役希望、自分の役名等、生徒たちで話し合って、一つ一つ決めていきました。劇の見せ場であるダンス大会の場面で、どんなハプニングが起こって、先生も一緒に踊ることになるのか。また、ダンスの後「ずっと友達だよ！！」のメッセージをどう見せるか。劇の後のカーテンコールで伝えたいこと、話す順番についても、実際に動いてやってみながら、決めていきました。週末に完成した台本を渡し、覚えてくるように伝えましたが、次の週の練習でも覚えていない生徒が多く、やる気が感じられなかったため、「セリフを覚えていない。一生懸命やらないなら、練習はしません。」と伝え、私は練習から抜けました。その後他の先生方に見守ってもらいながら、生徒たちは２時間くらい話し合いました。練習にどんな気持ちで取り組んでいたか、本当にいい劇にしたいと思っているのか、役の気持ちになっていなかったこと、自分のことばかり考えていて、周りの人のことを考えていなかったこと・・・話し合いの後、生徒たちに呼ばれ、話を聞きました。半分くらいの生徒が涙を流しながら、話し合って考えたことを一人ずつ伝えてくれました。私はすぐには「また練習を頑張ろう」という気持ちにはなれなかったため、「これからのみんなの行動を見ていきます。」と伝えました。「言葉では何とでも言えます。謝って、次からは頑張りますと言えます。でも行動で表さなければ相手には伝わりません。」この場を乗り切るためだけの言葉ではなく、それを次の練習から見せてほしかったからです。次の日の練習はそれまでとは違って、みんなで作り上げようという気持ちが伝わってきました。雰囲気も良くなり、生徒一人一人が一生懸命取り組んでいる様子が感じられました。

ですが、その次の週にも同じようなことがあり・・・生徒たちはまた話し合い、学校だけでなく、寄宿舎でも話し合ったそうです。そしてまた、みんなで頑張ろうということになり、練習が再開されました。青聾祭に向かっていく中で、いろいろなことが起こりましたが、生徒たちは気持ちを伝え合うことで、お互いを理解し、乗り越えていきました。乗り越えてからの生徒たちはみんなで劇を創り上げよう、成功させようという気持ちにあふれていました。少しずつ余裕が生まれ、アドリブも増え、表情も豊かになり、演じることを楽しんでいたと思います。青聾祭当日の劇は、セリフがないときも役になりきって相づちや表情で演技し、ダンスのときは笑顔で、最高の劇になりました。劇が終わった直後、生徒たちは「最高の劇になった。一生忘れない。いい思い出になった。最後のダンスで泣きそうになった。」等の感想の他に、お互いへの感謝の気持ちを話してくれました。私は、それがうれしかったです。

劇が終わったから、壁を乗り越えたから、終わりではなく、これからも言葉だけでなく、行動で表すことを続けてほしいと思います。また、自分の言動が周りに与える影響の大きさも考えてほしいです。そして、自分の限界を決めず、できると信じて頑張ってほしいと思います。初めはできなくても練習していくとできるようになります。できないと決めつけないで挑戦してほしいです。・・・みんながカーテンコールのときに伝えた言葉と同じですね。一つ一つとても意味のある言葉なので、大切にして、これから行動に表してほしいです。高等部生徒のみなさん、本当にお疲れ様でした。